

1月4日

「互いに熱く愛し合いなさい」

I ペテロ 1:22-23

武安 宏樹 牧師

① 愛のオキテ

創造主なる神は人を神に似せた最高傑作とし、神と交わるための霊を注ぎ、自由意志を以て喜んで神に従うようにされて、禁令を守るか否かで逸脱する可能性も残されました。神の關係に留まるか迷い出るかで、愛はルールです。加えて神の造られた社会は、夫婦&親子&隣人の各關係が必要となるゆえに、以上3つと無縁の人は居ません。そこへ再び悪魔が登場、神人關係以外にも、夫婦→親子→対人と關係が歪み、親を恨み、兄弟を妬み、友人をひがみます。著者ペテロは主イエスから「互いに愛し合いなさい」(ヨハ 13:34)と命じられて、「きよい心で〜熱く」と加えたのは、彼自身の罪性の悔い改めゆえでしょう。

② 神の愛で人と愛し合う

主イエスの戒めもペテロの勧めも共通し、神の愛アガパオーが使われます。私たちは全ての人間關係の間に、キリストがご自分を顧みずいのちを捨てた愛を置かなければ偽りであり、意図的に人を貶めたり無視したりしなくても、背後の自己愛ゆえに隣人愛に制限をかけ、自分より先に人を変えたがります。神を愛することは隣人を愛すること(Iヨハ 4:)。人はそれぞれ目的があります。神の聖さと純粹さは語源通り、人間的な思いに一線引き神に明け渡すことで、初めて働きます。真の信仰者は聖い一線を引いて正義と礼儀を踏まえた愛を示します。されど踏み込みすぎて傷つけたり逆に無關心など難しいものです。

③ キリストの兄弟愛で愛し合う

ペテロは表向き献身しているようでも、神の愛に完全に立てなかったので、師を裏切る結果となるも、主イエスの愛は完全で破門など考えませんでした。「あなたはわたしを愛していますか」(ヨハ 21:15-17 脚注参照)三度の問いかけに彼は神の愛でなく兄弟愛で愛しますと返したのは、恐れ多かつたのでしょうか。そこへ主は三度目に「あなたはその兄弟愛でわたしを愛するのだね?」と応じ兄弟愛の深さと背後に神の愛を学ばせます。先ず神にいかに愛されているか、次に兄弟愛が大事なステップ。キリストを中心に神&自分&隣人の三角形で、自分の内面を見つめましょう。宣教75年を迎えて愛に生きる年としましょう。

1月11日

「我が主の洗礼」

マタイ 13:13-17

河崎ダニエル宣教師

① 我が主の洗礼

イエス様はヨハネから洗礼を受けることで「すべての義を実現する」働きを始められました(マタ 3:15)。この洗礼はイエス様が公の働きを始めるにあたり、「大祭司」としての働きの始まりでもありました。旧約における祭司の清めが、その理解の鍵となります。モーセがイスラエルの国を定めようとしていたとき、神はアロンとその子らを水で洗い清めるよう命じられました(レビ 8:6)。彼らは、イスラエルの民を神への礼拝へと導く祭司として聖別される必要があったのです。さらに神は、イスラエルという国全体をも、世界のための「祭司の王国」として召されました(出 19:6)。イスラエルは、神様の義が現れる国となることが求められていました。しかし「すべての義が実現される」のは、イエスの祭司としての働きを通してのみでした。主イエスこそが、神様の義で全地を満たす新しい「祭司の王国」を創ることができたのです。洗礼により、主イエスは新しい王国のための、新しい大祭司の働きを始められたのです。

② 私たちの洗礼

私たちも洗礼を受けるとき、キリストによって定められた「祭司の王国」に加えられ、大祭司である主イエスの働きのもとで仕える「王である祭司」として生きる召しを与えられたのです(1ペテ 2:9)。この召しは、義の中を歩み、義を広めることにあります。人々は、私たちの生き方や主イエスについての証を通して、神を知り、礼拝へと導かれていきます。この召しは大きすぎると感じるかもしれませんが、しかし、イエスの洗礼において神が御霊を注がれたように(マタ 3:16-17)、私たちの洗礼においても神は私たちを喜び、選び、御霊によって油注いでくださいました。そして、神がイエスと共におられたように(使 10:37-38)、私たちとも共にいてくださるといふ約束が与えられています。この神の臨在こそが私たちを「王である祭司」として生かす力であり、私たちにはその道を導く大祭司イエス・キリストがおられます。このことを心に留め、「王である祭司」として、他の人々が神を知り、神を礼拝するよう助ける召しを担い、共に歩いていきましょう。

1月18日

「死の向こうに」

ヘブル 11:17-22

武安 宏樹 牧師

「イサクを死者の中から～ヤコブは死ぬときに～ヨセフは臨終のときに～」本日のキーワードは「死」。彼らは死で終わらない永遠を確信していました。「はるか遠く」(13節)は地理的だけでなく、空間&時間を超えた遠さの意です。私たちの目はどこを見ているでしょう。現代社会は自分と周りのことばかり、近視眼的にどうすれば自分たちの益になるか次第で、行動する人ばかりです。モーセの目は約束の地を一望し、入れずとも落胆しなかったのは次の世代に、希望を置いていました。アブラハムのイサク奉獻は旧約屈指の有名な物語で、子孫祝福の御言葉がどのように実現するのか。妻サラは生理が止まっており、死せる胎からの誕生から、神のことばは死から生を可能にすると分かります。普通の信仰者ならば苦節100歳イサク誕生で、生涯のゴールと思うでしょう。人間の弱さは自分の努力で無く神の恵みであっても、与えられると自分のと、握りしめることで、以降感謝はしても神と人に還元を惜しむようになります。アブラハムがイサクを殺そうとしたのは、子が主からの恵みである以上は、握りしめず徹頭徹尾主にお返しする中で、死から生への奇跡を見たのです。

人間的にはイサクを通して祝福の約束が反故に、神は詐欺師となりますが、アブラハムは子の中に、来るべきキリストの死から復活を読み取ったのです。闇雲に献げるのではないですが、私たちも最も大事な「独り子」を献げないと、死から生のダイナミズムが解りません。イサクがエサウでなくヤコブ祝福も、常識を超えた神の主権的恵みで、2000年後に末裔の主イエスとヘロデ大王の、魔の手をくぐり抜ける祝福のしぶとさを見ます。ヨセフは立身出世の地でも、彼は寄留者に過ぎず、神の約束の通過点に過ぎないことを解っていました。私たちが「骨を埋める覚悟で」証しますが、地上は永遠の住まいではない。死の向こう側の世界を現在進行形で生きる民です。「彼らは自分たちの死だけを見つめてはいませんでした。死に縛られた人生には自由がありません。それから解放される時、人はどんなことでもできるようになります。」(尾山)「彼らは神の約束が実現すると信じて疑わなかった。彼らは絶望せず希望を持って死んだ。その信仰が死に打ち勝った。彼らは死んでも神の約束はなお生きていたからである。ここに永久に残る偉大さがある。」(W・バークレー)